

『続虚栗』、その人間の磁場(中)

一

一冊の俳書を「詞林金玉」に見立てる古い読者たちが居た。今、その鑿に做えば、『続虚栗』という一冊の俳書もまた、一つの俳林に喩える事ができるだろう。その俳林の一木一草は、さながら学名を記した植物園の樹木のように丁寧に記録され、さらに季節の運行に合わせて整然と配列されている。もし、私たちが春の庭から歩き始めれば、時間は正確に廻って夏の庭に辿り着く。しかし、進むのも止まるのも私たちの自由である。私たちは、その庭園を自在に廻り、四季の樹木を愛でながら逍遙して、その贅沢な歩みを「読み」と言う。私の「読み」を気ままに過ぎると思われる方も、今しばらく御容赦願いたい。

さて、問題の焦点は、『続虚栗』の中から服部嵐雪周辺の門人たちを排除しようとする其角の編集方針にあった。其角は、内藤風虎を筆頭に彼の『六百番発句合』（延宝五年1675成）に参加した釈任口、伊勢村意朔、松尾芭蕉の四人をそれぞれ四季の部の最初に記して、言わば、古き良き時代の俳諧ディレクターたちを顕彰するかたちで『続虚栗』を編集していた。そして、その背景には、内藤露沾（内藤風虎の二男）に対する其角の特別な配慮があった。それに引き替え、同じ蕉門の兄弟弟子である服部嵐雪周辺の俳人たちは、

濱森 太郎

『続虚栗』の中から確実に排除されていた。

嵐雪周辺の俳人たちを排除するという其角の編集方針は、嵐雪自身身の句の取り扱いにも影を落としている。たとえば、次の其角・嵐雪の贈答などがその好例である。

たのみなき夢のみ見けるに

うたゝねのゆめにみへたる鯉かな

其角

その夢に戯ル

下部等に鯉くはする日や仏

嵐雪

一見何事もない贈答のように見えるが、この贈答は実は其角の母の死を弔う仏事を背景にした贈答である。其角は、貞享四年（1687）四月八日に母を亡くして以来、繰り返し亡き母の夢を見て眠られぬ夜を過している。其角の句の詞書に言う「たのみなき夢」とは、その亡き母の夢を意味する。その夢の中に、夏の訪れを告げる鯉が登場して其角を慌てさせたのである。

当時、江戸の鮮魚商たちは、殊に五節の日に季節の魚を大量に仕入れて得意先へ運んでいた。時期は、鯉の季節から考えて五月五日、端午の節句の日と考えてよいであろう。武家の下僕たちに盛大に鯉が振舞われるのも、そういう節句の日である。しかし、その日は、其角にとっては生憎母の死を弔う「四七ノ日」に当たっていた。江戸深川木場の其角亭では、その七日後の五月十二日に、亡母

追善の句会が予定されている。恐らく其角は、嵐雪に母の仏事と追善の句会の予定を知らせるついでに、先の鰹の句を添えたものと思われる。したがって、其角は、いまだ精進中の身の上である。そういう其角の夢の中に、生臭い鰹が登場したところに人の心の俳諧(滑稽)がある。其角は、それを率直に嵐雪に伝えている。しかし、それを承知で先の贈答を読むなら、「その夢に戯ル」と題した嵐雪の返しは、其角の心中を思い遣る配慮に欠けてると読めるのではあるまいか。「その夢に戯ル」という前書も不謹慎なら、「下部等に鰹くはする日や仏」という彼の当惑も不謹慎である。

だが、嵐雪の側から言えば、問題はむしろ『続虚栗』の構成の仕方にある。『続虚栗』に収められた其角の亡母追悼の発句は、まず其角自身の追悼句二句、続いて、芭蕉・其角・嵐雪一座の追善三つ物及び追善会に寄せられた追悼句十句、次に、先の其角・嵐雪の贈答各一句、そして、結びに、ふたたび其角自身の追悼句一句が配されて締めくくられている。それを図示すれば、次のようになる。

No.	作 品	句数	成立年次(貞享四年)
①	其角の追悼句(1)	1	四月八日(母死亡の日)
②	其角の追悼句(2)	1	四月十四日(初七日)
③	芭蕉・其角・嵐雪三つ物	3	五月十二日(五七日の、追善会)
④	各追悼句十句	10	五月十二日(五七日の、追善会)
⑤	其角・嵐雪贈答	2	五月五日(四七日の、推定)
⑥	其角追悼句	1	五月五日(四七日の、端午の節句)

この内、追善会④に追悼句を寄せたのは、露沾・枳風・沾徳・華白・嵐雪・蚊足・去来・野馬・全峰・魚児の十名で、その中には、嵐雪の名も見えている。そのため、うかつに読めば、嵐雪は、其角の母の死とそれにもなう其角の悲しみを承知の上で、其角の「たのみなき夢」に「戯」れているかに読める。しかし、それは、あくまで作品の成立年次を無視した其角の編集のせいである。

事実関係から言えば、其角の母の死が貞享四年四月八日、初七日が四月十四日、二七日が四月二十一日、三七日が四月二十八日、四七日が五月五日、五七日は、五月十二日、芭蕉や嵐雪が其角の母の死とそれを弔う追善会の通知を受け取ったのは、恐らく、五日五日(端午の節句、其角の母の四七日)前後。其角亭での追善会は、五月十二日(其角の母の五七日)前後。芭蕉と嵐雪とが打ち揃って其角亭を訪ね、母の仏前に追悼句をたむけたのも、この五月十二日。もし彼等が、四月八日に其角の母の死を知らされていたなら、追悼句をたむける時期が五月十二日まで遅れる事は、まず無かつただろう。「下部等に鰹くはする日や仏」という嵐雪の句にしても、下僕たちに鰹を喰わせる端午の節句が事もあろうに其角の母の仏事の日(四七日)に当たっている事への驚きの方が先立っていて、哀悼の意を表現する事には疎かである。嵐雪は多分、五月五日に突然其角の母の死と追善会の予定を知らされ、事の意外さに率直に驚いたのである。したがって、詞書に言うように仮りに嵐雪が其角の「たのみなき夢」に戯れたとしても、それは、「本当か?」という程度の半信半疑の気持と読むべきであろう。

だが、其角は、そうした事実関係を一切省筆して、『続虚栗』にいきなり、二人の贈答を掲載してしまった。これは、明らかに其角

の不備である。と言うより、其角はあえて、その不備を犯したと言
うべきであろう。

同じ事は、芭蕉と嵐雪との次の贈答にも言える。

聴閑

箴虫の音を聞きに来よ呷の庵

芭蕉

聞きにゆきて

何も音もなし稲うちくふて蠢哉むねこ

嵐雪

同じく二句一対の贈答だが、この贈答には何か肝心なものが欠け
ている。これでは、芭蕉が例の大きな鼻をひくつかせて喜ぶはずも
ないだろう。

問題は、二つの前書にある。勿論、箴虫が鳴くはずもないから、
「箴虫の音を聞きに来よ」という芭蕉の誘いが何か別れの心意を含ん
でいる事は疑いないが、問題は、その心意が果たして最初から「聴
閑」であったか否かである。

嵐雪が書いた「箴虫を聞きに行辞」（嵐雪文集）には、この時の
彼の心境がこう綴られている。

（前略）みれば、箴虫の聲鳴すましてつくりと居給ふ。おと
ろへをくらぶれば、霜蓬いまだ壮なりしか。ことちからを論ず
れば、風柳猶つよし。ふむ所坐する所音なし。かみ子の古けれ
ばなり。ゆへにぞ、かの聲は聞。予が性のさはがしきには、な
に恋しとも聞へず。聞事にもあらじ。見る事にもなけん。かれ
が情と閑人の閑と猶く閑のすぐれたるなるべし。虫ヨ翁のか
しましからん。鳴そ。（俳諧文庫『嵐雪全集』（83頁）所収。
句詠点・濁点・傍点筆者）

この一文によれば、嵐雪が江戸深川の芭蕉庵にたどり着いた時、

肝心の箴虫はすでに鳴き終わっており、そして嵐雪には、その上何
を聞けばよいのが分からなかった。その原因は、勿論、芭蕉から
届けられた箴虫の句に「聴閑」という前書が無かったからである。
したがって、嵐雪からすれば、この箴虫は「ちちよちちよ」（枕草
子）と父を尋ねて鳴いてもよく、またかつての嵐雪自身のように
「母恋し」（「左月音に我箴虫や母恋し」「虚栗」と鳴いてもいっ
こうに差し支えない虫であった。少なくとも彼は、この「箴虫」
を、芭蕉の「閑」を何かと妨げる騒がしい虫けらとして了解してい
たのである。

だが、その箴虫の句に「聴閑」という前書が添えられた時、この
事態は一変してしまう。これによって、嵐雪は、たちまち「閑」を
聴き得ない粗忽者に成り下がるのである。こうした其角の編集態度
を見ては、芭蕉と言えども其角への支援をためらわざるを得なかつ
ただろう。

こうした事態に直面して、松尾芭蕉は、いったい何を考え、どの
ように行動したのか。まず彼の心底を確めるために、さらに二年間
の時間を遡ってみる事にしよう。

二、蕉風俳諧道建立の夢

貞享二年正月、故郷の伊賀上野で新年を迎えた松尾芭蕉は、引き
続き奈良・京都・大津を巡遊して四月末に江戸に帰着する。いわゆ
る甲子吟行の旅の終着である。この年、彼四十二歳。当時の常識に
従えば、すでに初老の俳諧師である。その初老の峠を目の前にして、
彼もまた彼なりの人生の終着を思い描かなければならない立場にあ
った。しかも、その終着は、彼個人の人生の終着である以上に、蕉

風という名の新しい俳句運動の終着でなければならなかった。この点を抜きにして、芭蕉の晩年を語る事は避けなければならない。貞享元年（1684）八月の甲子吟行以後延々と続く彼の旅の人生が、この新しい俳句運動と不可分の関係にある事は、今さら言つまでもない。

当時の彼は、すでに江戸に住む一介の俳諧師として安穩な一生を終える望みを捨てていた。それは、この後の彼の旅の人生が証明している。かと言って、その彼の志を『奥の細道』の主人公になぞらへて、「漂泊の思」と片付けるのでは曖昧にすぎる。それよりはむしろ、「万世に俳風の一道建立の時に、何ぞ小節胸中に可置哉」（井去来宛書簡、元禄七年正月二十九日付）という彼の肉声の方が、私には遙かに明快である。あるいはまた、「一道建立の心にて、言葉つまりたる時をくつろげたる味にて折々集を出し候。」（句空宛、元禄三年十二月付）という彼の發言を引いても良い。蕉風俳諧道建立のための諸国行脚と句集の發行。これは、まぎれもなく一門を率いる実践的な統率者の言動である。そしてその点からすれば、貞享元年八月から始まったいわゆる甲子吟行は、名古屋・大垣・伊勢山田・伊賀上野・近江大津に蕉門の拠点を作り上げて成功裏に幕を閉じたと見る事ができるだろう。しかも、それを地勢的に考えれば、その拠点は、東から京都・奈良という俳壇の頂点を包圍する形で形成されている。これは、無論偶然ではない。この図版の上に、貞享元年の京都での歳旦帳の發行という一事を加えれば、芭蕉の狙いが目に見えるからである。俳壇の頂点、貞門派の牙城、京都への進出。一門を率いる宗匠なら誰もが一度は見る夢である。甲子吟行は、その夢の周りを一廻りするかたちで終わっている。

貞享二年五月十二日、江戸深川の芭蕉庵に帰着した芭蕉は、さっ

そく、近江大津の俳人三上千那に宛てて次のように書き送った。

一、愚句其二元而之句

辛崎の松ハ花より體にて と

御覽可被下候。

山路來て何やらゆかしすミれ草

其外五三句も有ら之候へ共、重而書付可申候。

書簡の主旨は、大津の千那宅での芭蕉の発句が、「辛崎の松ハ花より體にて」の句型に改められた事を伝えるものだが、それに加え、甲子吟行の收穫も何やらおぼめかし気味に語られている。しかも、その末尾に「其外五三句も有ら之候へ共、重而書付可申候」とあるところからすると、松尾芭蕉はこの時すでに甲子吟行の收穫の内から「五三句」以上の発句を大津の千那に書き与える約束をしていた事になる。無論、これは、単なるサーピス精神からの發言ではあるまい。

周知のように、この時期、大津の千那・尚白等は、句集『孤松』ひとつまつの出版を計画していた。京都で歳旦帳を發行し、名古屋で『冬の日』を出版し、さらに江戸で『統虚粟』、大津で『孤松』を出版するとなれば、これは、芭蕉にとっても大きな幸いである。ことに、大津は、地勢的にも京都進出を計るための最大の拠点である。琵琶湖の水運の他に、東海道・中仙道もここで合流して京都に向かう。湖岸に密集した問丸は、単に荷物の中継点ではなく、文化の中継点でもあった。京都の月次の句会に寄せられる雑俳の類は、この問丸の手で京都の宗匠の手元に届けられていた。注4その土地で、蕉門の句集を發行する事の意味は極めて大きい。芭蕉にも、その意味の重大さがはっきりと見えていただろう。勿論、彼は、江戸の門人知人た

ちにも寄稿を依頼するための仲介の労を取った。その証拠に、先の書簡の末尾近くには、「其角へ御状、重而返状可仕候。嵐雪他國へ罷候間、不_レ及_レ資報_一候」という干那に対する具体的な指示のとばまで書き添えられている。これは、干那が、直接其角・嵐雪に寄稿を依頼する事に対する芭蕉の助言ではあるまいか。

さて、芭蕉の仲介に依えて『孤松』に発句を寄稿したのは、素堂・嵐蘭・蚊足・仙化・文鱗・其角の六名。この内、素堂・嵐蘭は芭蕉周辺の人物であり、蚊足・仙化・文鱗は其角周辺の人物である。先の書簡の指示通り、嵐雪の名は、この中には見当らない。彼等の寄稿句の数は、素堂と其角とが各々二句、その他の人々は一句。この句数からも、彼等の寄稿が儀礼的なものであった事が知れる。『続虚栗』の出版を計画している彼等には、恐らく、全面的な肩入れの余力が無かったのである。

ところが、その中であって、一人芭蕉だけは、十七句の発句を『孤松』に寄稿した。その内訳は、『野ざらし紀行』から十一句、『春の日』から一句、その他五句。その他の五句の中には、『あつめ句』と重複するもの二句、『続虚栗』と重複するもの二句が含まれている。したがって、特に『孤松』のために急いで整えられた句は、せいぜい五句と考えてよい。過去の蓄積の中から選りすぐった句が寄稿されているのである。これは、後の『曠野』や『猿蓑』に比べても決して遜色のない芭蕉の助力の証明である。

芭蕉の寄稿時期の上限は、寄稿句の最終成立年次が貞享三年八月二十七日と推定される事からみて、貞享三年九月。下限は、『孤松』が刊行された貞享四年三月二十五日（『孤松』の奥書による）。ただし、下限については、貞享四年三月二十五日から、草稿の編集・

版下の清書・版下の彫木・印刷・製本等に必等な日数を差し引いて、おおむね貞享四年正月以前と推定する事もできる。いずれにしてもそれは、江戸において『続虚栗』の編集計画が練られている間の事である。京都進出を計る芭蕉にとって、この寄稿は当然な処置だったにちがいないが、『続虚栗』の眉目となるべき大切な句が、みすみす『孤松』に寄稿されるのを座視している事になる。恐らく、其角は、複雑な気持ちでこの処置を見送っていただろう。

三、芭蕉と江戸蕉門

視点をふたたび江戸に戻してみよう。貞享三年正月、江戸では、宗匠立机早々の其角を囲んで、「日の春を」百韻一巻が完成する。参会者は、其角・文鱗・枳風・コ斎・芳重・杉風・仙化・李下・挙白・朱絃・蚊足・ちり・芭蕉・執筆の十四名。句会は二日に渡ったのであろう。五十句を過ぎるあたりから、揚水・不ト・狭水・千春の四名が新たに加わり、替りに、杉風・蚊足・ちりの三名が欠席している。この句会は、其角周辺の文鱗・枳風・蚊足等によって主催され、芭蕉とその周辺の杉風・李下・ちり等が言わば相伴役で出席するやや晴がましい句会である。この時、越後の高田にあってやむなく欠席した服部嵐雪は、この年の其角の歳旦帳に句を寄せて「正月も身は泥（ドロ）のうなぎ哉」と僻地で越年する我身の不遇を嘆いていた。

しかし、句会の盛況と作品の出来映とが、かならず比例するとは限らない。すでに貞享二年正月二十八日、松尾芭蕉は、郷里の親友山岸半残に宛てて「『みなし栗』なども、さたのかぎりなる句共多見え申候」と語るほど冷めた目で周囲の門人達を見ていた。その芭

蕉が書いたと思えば、たとえば一見讃辞に満ちている『初懐紙評註』にしても、それなりの読み方が必要なものではあるまいか。

今、試みに、その『初懐紙評註』（貞享三年春成立）から其角の句に対する芭蕉の批評を引用してみたい。

（憎まれし宿の木槿の散るたびに

文鱗）

後住女きぬたつち〜

其角

後住女は、後添の妻といはんため也。「憎まれし」と言にて、

後添の物ごと和せざる味をこめたり。（中略）甌味浅からず。

（『芭蕉集』（古典俳文学大系5）所収本文）

不思議なのは、この「憎まれし」という表記である。『初懐紙評註』では確かに「憎まれし」とあるが、其角自筆の「日の春を」百韻（別名「丙寅初懐紙」）を得てその記念に出版された鶴歩の『鶴いあゆみ』（享保二十年二月刊）では、これが「にくまれし」とある。そして、また、芭蕉自身も、『初懐紙評註』のこの一句前の註釈では、「木槿のはかなくしほりめく、我身の思ひしほると言より、「にくまれし」と五文字置なり。」と書いている。とすれば、やはりこの部分は、芭蕉の手元の懐紙では「にくまれし」と仮名書きにされていたのではあるまいか。

もとより、事は単なる表記の問題ではない。もし、この部分が仮名書きであったなら、それは前後の文脈によっては、憎しみを意味する「にくむ」とも、愛惜を意味する「にくむ」とも読む事ができるからである。

其角の句が、碓きねたの文学の伝統を踏まえて、碓を打ちつつ夫を偲ぶ妻の姿を描こうとしたものである事は疑いない。ただし、その伝統に照らせば、夫を偲ぶ肝心の妻が夫に憎まれ、萎れていたというの

では奇妙である。芭蕉の評註にもかかわらず、この「にくむ」を愛惜の意味と取って、「あの方は、この木槿の花が散るたびに惜んで、おいでだったか……」と、庭の木槿に昔を偲ぶ妻の心を描いたものと解する方がはるかに自然なのではあるまいか。「あらざらむ後忍べとや袖の香をはな橋にとゞめ置きけむ」（新古今 44）など、古来、庭の草木をよすがとして昔を偲ぶ例は多いのである。

ちなみに、この部分は、定稿以前の句型を留めていると思われる『丙寅初懐紙』（鶴齡堂編・宝暦十一年刊）以下の諸本（三本）では、いずれも「惜まれし」とある。この「惜まれし」であれば、解釈は、まずまちがいがなく、先の私の解釈に落ち着くはずである。

勿論、私は、実際にこの句会に出席した松尾芭蕉がその程度の事を知らなかったというつもりはない。彼は、恐らく其角の句の推敲の次第を承知の上で、あえて表現を改めてまで句意を曲解しようとしているのである。理由は、夫を偲ぶ妻の心情ならすでに前書に尽くされており、この上さらに夫を偲ぶ妻の姿を重ねる事は、結果として三句がらみの難を招くからである。したがって、もしさらに碓を打ちつつ夫を偲ぶ妻の姿を描くとするなら、その女は、当然、夫を慕う通常の女とは一味違った女でなければならぬ。芭蕉が「後住む女」から強いて家風になじめないで「憎まれる」後添の妻の姿を読み取るうとするのは、多分そのためである。だが、それにもかかわらず、彼は其角の句を評して「甌味浅からず」と強弁している。いかにも苦しい批評である。

次に、その苦しい批評をもう一例だけ上げる。

（葉分の風とやに矢筈切やはずに入る

其角

かゝれとて下手の懸たる孤ひとりわな

其角

藪陰の有様、あり〜と見^ま待^まてる。しかも、句作り風情をぬきて、たゞ有のまゝに言捨たる句続き、心を付べし。

批評の焦点は、藪陰の有様を「風情をぬきて、たゞ有のまゝに」表現した其角の手腕を賞讃する事にある。しかし、肝心の其角の句は、かならずしも藪陰の有様をたゞ有のまゝに言い捨てる事を狙った作品とは考えがたい。たとえば、「かゝれとて」・「下手の懸けたる」など、一読して明らか通り、彼の句の狙は、藪陰に無様に仕懸けられた孤わなを見付けた男の内心を表現する事にあるからである。したがって、この句を評して「たゞ有りのまゝに言捨たる句続き、心を付べし。」とは、明らかに芭蕉の曲言である。

其角への心遣いも、これでは何やら苦々しいが、それを言うなら、まずその前に、意に満たないこの百韻に自註を加える芭蕉の苦々しさを思うべきであろう。彼が江戸に帰着した貞享二年正月末からこの貞享三年正月末までに満尾した連句の数は、わずかに二巻。さらに、貞享三年二月からその年の年末までに満尾した連句の数も二巻。これを、貞享四年の一年間に満尾した連句十一巻と比較すれば、その低調さが分かるだろう（詳しくは、拙稿「『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折（一）」（三重大学教育学部紀要 第31巻2号））。一方に、江戸蕉門の高弟宝井其角でさえ芭蕉の直言に値する句を作り得ない現実があり、他方に、その其角を蕉門の後継者として認知しなければならぬ芭蕉の俳壇構想があった。その狭間の中で「日の春を」百韻の自註を書く芭蕉の筆は、曲言に向かって延びている。

無論、芭蕉の曲言にも限度はあった。貞享三年春、彼は病氣と称して先の百韻自註を五十句までで打ち切り、その一方で、早くも江戸脱出を考えていた。京都の向井去来に宛てては、「当秋、冬、晩

夏之内上京」（貞享三年閏三月十日付）と書き、尾張鳴海の寂照に宛てては「夏之中には登り可^レ申候。」（貞享三年閏三月十六日付）と書き送っている。ちなみに、この寂照宛の書簡には、「何角障事^{なにかくさうじ}共心にまかせず候而、いまだ在庵龍有候。」という旅立の延期を断る言葉が見えている。とすれば、早ければ貞享二年の年末あたりから、芭蕉はすでに江戸脱出を考え、その予定を上方の門人達に伝えていた事になるだろう。貞享二年七月十八日、近江大津の千那に宛てて「罷帰候へば、又いつ上り可^レ申様にも無^レ御座、一入^{いり}〜御ゆかしきのみ候。」と再度の上京のおぼつかなきを語っていたはずの芭蕉が、わずかに六ヶ月でその気持を変えていたのである。

だが、この貞享三年閏三月、ともかく芭蕉は「何角障事^{なにかくさうじ}」のために一旦は上京を中止した。そして、その時点では、次の上京の目安はおおむね貞享三年晩夏以後の頃と予定されていた。それまでには、『続虚栗』の編集作業をも完了しておかなければならなかった。おまけに大江では、『孤松』の編集作業が着々と進展し、この秋には終盤を迎えるはずであった。この両者を睨みながら、恐らく芭蕉は上京のタイミングを窺っている。この二つの句集が東西で同時に出版されれば、世間はいや応なく蕉門の力量に注目せざるを得ないからである。そして、その時、芭蕉は是非とも京都に旅装を解いていなければならない。でなければ、この貧しく後植の乏しい旅の俳諧師の存在を京都の宗匠達の胸に強烈に焼き付ける事ができないからである。

しかし、予定の貞享三年秋を過ぎても、芭蕉は動けなかった。十月二十九日、芭蕉はふたたび寂照に宛てて「もはや寒氣に移候故思ひ留り、来年はかならず上り候而、可^レ得^レ御意候。」と断りの手

紙を書く。そしてまた、同年十二月一日にも、彼は三たび寂照に宛

てて「何角心中障る事共出来延引云々」と江戸出立の中止を書き送っている。「何角心中障る事共」とは、これまたいかにも曖昧な言い廻しだが、同じ書簡に挿入された「此比ハ発句も不仕、人のも不承候」という芭蕉の一文からは、芭蕉の創作意欲の衰えと、江戸における「統虚栗」編集作業の遅延とが匂っているだろう。芭蕉自身、「閑居の箴」（貞享三年冬成、本朝文鑑）において、その内心の苦悩を次のように語っている。

日比は人のとひ来るもうるさく、人にもまみへじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや。物をもしはす、ひとり酒のみて心にとひ心にかたる。（中略）あら物ぐるおしの翁や。

かくして、「何角心中障る事共」のために延々と江戸出立を延期する芭蕉の心中に、まことに憂鬱な孤立感が渦巻いていた事は明らかである。大津では『孤松』の編集が終盤を迎えていたが、江戸の『統虚栗』は生まれそうもなかった。時の経過と共に芭蕉の俳壇構想そのものが崩れていた。大津の『孤松』も、尚白等の手にまかせておいては、純蕉風の句集にはなりがたい。彼の憂鬱は、門人達への不満を通り越して人間そのものを厭う倦怠感にまで達している。

しかし、門人あつての蕉風俳諧である。無理に頭数を揃える必要はないが、「月の夜」「雪のあした」、こよなく風流を愛する知友が居なければ、蕉門の意味がない。彼は、倦怠感の底に居て、「物ぐるおしい」心でその知友を求めている。その心を、彼は「わりなしや」と言うが、それが見えてくれば、彼は、いや応なく動き始める。この知友を求める心こそ統虚栗の宿命だからである。

四 江戸の暗雲

明けて貞享四年正月、恒例の歳旦帳をいよいよ京都で発行した芭蕉は、引き続き再度の上京を願っていた。しかし、その目処は容易に立たなかった。貞享四年春には、「夏中可_レ得_レ御意一候」（寂照宛）と語り、同じく貞享四年三月十日には、「秋登り候はゞ、一板行とすゝみ申候」（東藤・桐葉宛）と前言を撤回する仕末である。そして、その撤回にもかかわらず、彼の実際の旅立はさらに貞享四年十二月二十五日まで延期された。それは、『統虚栗』の刊行（十一月十三日）を直前に控えながら、それを決して手にする事のない寒期の旅立である。

その間、『統虚栗』の編集を巡る其角・嵐雪の確執がどのように収拾されていったのかを正確に語る資料はない。だが、貞享四年春、去来・芭蕉・其角・嵐雪一座の「久かたや」歌仙成立。同じ比、露沾・其角・沾徳・露荷・嵐雪・虚谷の一座する「春興」歌仙（統虚栗）成立。貞享四年五月十二日、芭蕉・其角・嵐雪の一座する其角の母追悼の三つ物（統虚栗）成立。こうした句会を重ねる事で、両者の接近が計られている。接近を計ったのは、恐らく芭蕉と露沾とである。

たとえば、『統虚栗』所収の「素堂序」には、次のような暗示的な一文がある。

来る人のいへるは、「われも又、さる翁のかたりける事あり。鳩の浮巢の時にうき、時にしづみて風波にもまれるがごとく、内、こゝろざしをたつべし」となり。余笑ひてこれをうけがふ。いひつゞくればものさだめに似たれど、屈原楚國をわすれずと

かや。

「鳩の浮巢」にたとえて入内なる志の保持を説くこの「さる翁」が芭蕉を暗示しているらしい事は、「翁」という呼称からも容易に推測する事ができる。だが、そのもっとも端的な証拠は、貞享四年五月、芭蕉から露沾に送られた「五月雨に鳩の浮巢を見にゆかむ」という発句である。この発句によって、「鳩の浮巢」が芭蕉と露沾との了解事項であった事が分かるだろう。先の「素堂序」によれば、素堂を訪ねた来客もまた、どうやら、この「鳩の浮巢」のたとえを引いて、芭蕉から説得された事があるらしい。そして、素堂もまた、この来客に向かって入内なる志の保持を説いたのであろう。その素堂の説得に応じて、来客は「さる翁」(芭蕉)から説得された次第を語り、素堂の説得に同意する。素堂は、それに満足し、さすがに屈原「楚國をわすれずとかや」と来客の志を賞讃している。

問題は、この屈原にたとえられた男の名である。当時の状況から考えて、芭蕉や素堂の説得を必要とする男はそう多くはないだろう。『統虚栗』の編集作業を軌道に乗せるために、芭蕉や素堂が是非説得しておかなければならないのは、まず其角と嵐雪とである。中でも、嵐雪の処遇こそ『統虚栗』の焦点である。また、嵐雪が時に屈原を自称する男であった事は、

鶴さもあれ顔淵ハイク生て千この春

其角

身の正月ヲ屈原が酔、

嵐雪(虚栗)

という付合によって裏付けられる。芭蕉や素堂は、その嵐雪の志に期待して、説得していたのである。

服部嵐雪、当時三十四歳。寛文年間は、新庄隠岐守に仕えたが、

延宝四年(1676)六月二十一日、主君急死の後、後継の処置よからずとの理由により領地没収。その後、土方河内守に召抱えられたものの、その土方河内守も延宝七年(1679)十一月二十七日、主君致仕のため免職(『蕉門俳人年譜集』『服部嵐雪』、石川真弘編)。それが今また、井上相模守に従って越後高田城で貞享三年の新春を迎え、閏三月、江戸に帰着して蕉門に復帰する。この越後への隨身もまた、領地没収により主君を失なった高田城の守護のためである。この経歴を見る時、彼もまた、いや応なく時代の申し子である。

貞享元年(1684)七月、岩槻藩主土方雄隆、領地没収。松崎藩主有馬豊祐、領地没収。十一月、佐貫藩主松平重治、領地没収。貞享二年六月、マカオ船、日本の漂流民を護送して長崎に来航。同じ月、幕府はマカオ船に退去を命ずる。七月、生類憐みの令。八月、浅草観音別当門前の犬殺傷の件により観音別当を奪う。この年、幕府は、糸割符の制を再興して長崎における海外貿易の貿易額を定める。

対外的には鎖国策を徹底し、その一方で、強権を用いて綱紀を肅正し、殺伐を嫌う温順の風風を育てる事が、当面の幕府の基本政策であった。そして、その一環として、世上では、幕府の諸藩取り潰し政策が強行されていた。五代將軍徳川綱吉の代に、改易・減封に処せられた大名四十六家、没収された領地百六十一万石。また、改易・減封に処せられた旗本御家人百余家、役儀罷免や閉門に処せられた直参旗本の数は、おびただしい数にのぼったという(辻達也『享保改革の研究』)。嵐雪のような下級武士もまた、その度に失職し、離散して行かなければならなかった。

勿論、武家の上にも綱紀肅正策が強行されたわけではない。すでに延宝八年(1670)六月八日、『西鶴大矢数』(延宝九年刊)の

興行を終えた井原西鶴は、下里勤州に宛てて「一日之内(中略)、一句もいやしき句もなし。又は天下にさはり申候句もなし」と、一応断つてはいる。しかし、その彼も、貞享元年四月及び九月に、幕府が瓦板等みだりな書籍の出版を禁じて、「家主致三吟味」、何方に而も左様のもの一板行仕間敷候」(徳川禁令考、巻四六)とまで言い出すとは予想しなかつただろう。また、貞享二年、長崎に入港した第十五番船の積荷の中から『實有詮』という名のキリスト教書が発見されたのを機会に、幕府は、輸入書籍の取り締りをも強化する(『近世出版法の研究』、中村喜代三)。

慰み物の俳諧と言えども、この取り締りの域外にあるものではない。その逆に、俳諧のような慰み物がはびこる事こそかえって重大な問題だったのである。そうした御時勢の中で、松尾芭蕉は、露沾や嵐雪に向かつて八内なる志Vの持統を説いている。貞享二年九月十九日、藩主内藤風虎を失なつた磐城内藤藩では、露沾に替つて弟の義孝が藩主の座について事なきを得ていた。彼等もまた、志を持統する事で、かろうじて我身の平衡を保つていたのであるまいか。

五 鳩の浮巢

振り返つて見れば、志の詩人杜甫に我身を擬する事が芭蕉の文学の出発であった。彼は、貞享元年秋には「露とくく心みに浮世すゝがばや」(『野ざらし紀行』)と我身の志を語り、さらに貞享三年正月にも「幾霜に心ばせをの松かざり」と語っている。「詩は志の之くところ也」(『詩経』)という名句を引くまでもなく、志を

慰み物の俳諧を敬うに足る文芸道として大成させるためには、是非ともその志が必要であつた。李白を気取る其角も屈原を気取る嵐雪もこの例外ではない。彼等もまた小異を捨ててこの八内なる志Vを共有しなければならぬのである。

だが、問題は、その持統の困難さである。一方に、雑俳を愛好する江戸の庶民が居り、他方に、俳諧的表現の自由を抑圧する將軍の居る江戸の町では、彼等の志は常に風化と抑圧の危機に耐えていなければならなかつた。「蕎麥切・俳諧は、都の土地に成ぜず」(蕎麥切頌・雲鈴)とは、京都の文学風土を批評した芭蕉の言葉だが、この言葉は、恐らく当時の江戸の町にも当てはまるだろう。こうした困難な文学風土の中で、彼等はどのようにして前途を切り開いて行けば良かつたのか。

考えてみれば、議論はふたたび俳諧の上に戻ってくる。要は、俳諧自体が、庶民や権力者の枠を越えて、人間普遍の人情を盛る器として改めて考え直されなければならないのである。ただ肝心の人間の方は、その言葉使いから立居振舞に至るまで、すべて身分の枠の中で生きていたし、その枠から逸脱する者は、厳しく監視されていた。身分に縛られない遊芸人の類は、自由人であるよりもむしろ厄介者であつた。そうした状況の中で、人間普遍の人情の領域をどこに向かつて求めれば良かつたのか。例えば、衣・食・住のような生活の原型の中へか。それとも、味覚や聴覚のような人間共通の感覚の中へか。あるいはまた、エゴやねたみのようなプリミティブな感情の中へか。それとも、遊芸や旅行のような文化的な娯楽の中へか。そこに、芭蕉の思案があつた。

もし、彼の求める俳諧が、時々の人情に取材する雑俳の類なら、事はそうむづかしくはなかっただろう。だが、八内なる志Vを説き、八誠Vの俳諧を勧める芭蕉が求めているのは、それではない。俳諧が、娯楽としてではなく、まっとうに生きるための処生の「たしなみ」として尊重される事なのである。そのためには、人情の流行するところに目を奪われてはならない。流行の底を貫流する人情の精髓を呼び醒まし、人をして、その本然の願ひ、すなわち八志Vに帰らせる事から始めなければならぬのである。そこに、芭蕉の苦心があった。

今、試みに、生類憐みの令に関わる「犬」の生態を例として取り上げてみよう。

天和元年(1681)に出版された『俳諧次韻』には、まだ、芭蕉自身の手になる次のような犬殺しの句が掲載されている。

① とひやう仁は気より世を驚て

犬切つて其声かなしく

揚水 桃青(芭蕉)

〔春澄にとへ〕百韻

さらに、天和三年(1683)に刊行された『虚栗』でも、事情は似通っている。

② もるに書ヲ葺閑窓の夜

犬わなにかゝるは酔の翁にて

岡南 (其)角

③ 朝白の曉花もる犬の声憎し

犬ひいてとうふ狩得たり里夜興

樵花 其角

④ 僕が雪夜犬を枕のはし寝哉

杉風

⑥ 雪の、犬箒になくや娘捨山 四反

犬釣り(西鶴、氷代蔵卷四の四)などという物騒な職業があった当時の事として、犬の虐待も当然と言えば当然だが、野犬狩りの「犬わな」の外に、声を出す事さえ憎まれる犬、豆腐を手に入れるために獵犬替りに使われる犬、酔人の枕に使われる犬、箒で打たれる犬など、かなり公然と犬を酷使する様子が描かれている。

だが、生類憐みの令が公布された貞享二年(1685)を境に、この様子は一変する。貞享四年に出版された『孤松』(江左尚白編)や『続虚栗』(宝井其角編)では、お犬様はすでに厄介な存在として登場している。

① 寢覚時鳥明なば犬に礼いふべし、 元順(孤松)

② 淀舟や犬もこはがるほとゝぎす 其角(続虚栗)

③ 筍よ竹より奥に犬あらん 其角(続虚栗)

④ 萩原や一夜はやどせ山の犬、 芭蕉(続虚栗)

⑤ あき乗物のたて所かる (野)馬

被敷その夜を犬のとがむらん (孤)屋(続虚栗)

殊に、将軍のお膝元で編集された『続虚栗』では、人間は、お犬様を恐れながら戦戦兢兢として暮らしている。ここでは、もう、人間は、犬よりも弱者である。これは、勿論偶然ではない。芭蕉や其角は、権力の見えない磁力に敏感に反応して、この迷惑な御時勢に当惑する自分たちの姿を描いてみせたのである。自分たちの当惑を

描くことが、恐らくそのまま権力者に対する彼等の精一っぱいの擧げの表明であった。

だが、その擧げをもってすべてが終了するわけではない。それならば、彼等の俳諧は川柳で充分なのである。彼等の俳諧が、人間本来の願いを盛る器として大成するためには、もっと大きなある種の発明が必要だったのではあるまいか。その発明がなければ、蕉風俳諧が時代を吸引する強力な磁力と成る事はありえなかつただろう。

貞享四年春から夏にかけて、其角と嵐雪との関係は、一応、修復される。それを機会に、『統虚栗』の編集作業は急速にはかどり始めた。其角の母の死は、そのきっかけの一つとして役立ったものと思われる。残された課題は、一つの時代を生きた人々が、心の内で共通に願いながら、しかもいまだ鮮烈なイメージの形で見る事のできなかつた新しい夢の発明である。「我が心は右に匪ず、あら転ずべからざるなり。我が心は席に匪ず、ま巻くべからざるなり」(『詩経』「柏舟」) 堅くかつ柔らかな志が必要であつた。

注1、『守貞漫稿』(六)「鮮魚商」に「得意アル魚売ハ、五節及ビ土神祭祀等の日ハ僕両三人ヲ供シテ、魚籠二三荷ヲ持巡ル。」とある。『東都歳事記』(天保九年刊)「四月」の末尾には「初堅魚(東都にこの魚を賞する事他那にすぐれ、相州より送る所味はひ美なり。鄙賤の者も高価を出してこれを求む。)とある。内藤風虎編の『六百番発句合』(延宝五年成)にも、すでに初堅の句がいくつか見え、夏の風物として定着している様子が窺える。

注2、『守貞漫稿』(六)「鮮魚商」に「江戸ノ魚売ハ、四月初、松魚売ヲ盛ナリトス。(中略)値一分二朱、或ハ二分バカリ

也。」とある。比較的高価な魚であつたらしく、通常の食料であるよりもむしろ御馳走であつたものと思われる。

注3、『統虚栗』では、五月五日を母の「三七ノ日」とするが、母の死亡した四月八日から数えると、五月五日は「四七ノ日」にあたる。嵐雪の句に言う「日や仏」は、下僕に齧を食べさせる事のできた今日は、私も仏の気分だという意味の外に、その日^が其角の母の仏事の日(四七ノ日)に当たっている事をも懸けた表現だと思われる。其角が五月五日をなぜ「三七ノ日」と書き誤つたかは、不明。

注4、鈴木勝忠著『川柳と雑俳』(昭和54年、千人社刊、P.26)

注5、特に『野ざらし紀行』から選ばれた十一句は、名吟が揃っている。

注6、芭蕉の寄稿句の中では、「明行や二十七夜も三日の月」(貞享三年八月二十七日の頃の作と推定される)が最終成立句である。

注7、『蕉門俳人年譜集』(石川真弘編、前田書店刊、P.105)によると。ちなみに、この年の井筒屋版歳旦帳「引付貞享三年」の「其角引付」は、芭蕉の歳旦句「幾箱に心ばせをの松かざり」を収め、京都で出版されている(『校木芭蕉全集巻九』井本農一編、P.170)。

注8、「芭蕉歳旦状付俳諧探勝集——千代倉家代々資料考——」森川昭(『俳文芸』四号)参照。ちなみに、芭蕉は、『京羽二重』(元禄四年刊、林鴻編)では京都の俳諧師として登録されている。

注9、貞享三年閏三月二十日成立の「花咲て」歌仙以後、習貞享四

年春の「久方や」歌仙まで、芭蕉・其角・嵐雪一座の連句は見当らない。

注10、両者の交友関係から見ても、芭蕉が嵐雪の説得を担当し、露沾が其角の説得を担当したものと思われる。

注11、露沾は、天和二年二月以来、不行跡により退身の身の上であった。弟の義孝は、露沾の子豊松を迎えて継嗣とした（『俳諧大辞典』「露沾」岡田）。

注12、当時の芭蕉の発言の中には、「凡天下の俳諧にて御坐候間、随分御敬候て御はげみ可_レ被_レ成候」（貞享三・四年三月十四日付、東藤・桐葉宛）という発言がある。

注13、八誠Ⅴの俳諧と現実政治との関わりについては、乾裕幸『ことばの内なる芭蕉』（未来社刊）所収「もう一つの八誠Ⅴ」参照。